

## 親の離婚を経験した子どものころ

— 離婚を経験した親と子どもの調査から —

平 松 千枝子

### Sadness and Sufferings in Their Emotions of Children Involved in Divorce and How to Care and Get Over Them

Chieko HIRAMATSU

#### 要約

子どもは、親の離婚をどう受けとめ、どのような影響を受けるのかについての調査結果をまとめた。離婚の前には、父母間の激しい争い又は冷え切った雰囲気の中で、子どもは息を殺して推移を見守り、離婚になったら自分はどこで、誰と暮らすことになるのだろうかと不安と緊張に包まれている。離婚後は、別れて暮らす親の喪失感と悲哀感、激変する生活環境への不安感、世間の偏見と哀れみのまなざしを意識して友達にも言えない寂しさ、孤独感に悩んでいる。離婚する際には、なぜ離婚するのか、離婚したら生活環境がどう変わるのかなどを分かるように説明し、子どもの気持ちを十分に聴いて、配慮してくれることを子ども達は望んでいる。また、子どもは離婚は仕方がなかったと受け入れている場合が多いが、基本的には両親の離婚を望んでおらず、たとえ離婚してもどちらの親からも愛されたいと望み、別れて暮らす親への思いを胸に抱えている。何よりも、子ども達は、同居している親や友達などには話せない胸の中を、気軽に話し、聴いてもらえる場や支援を望んでいる。

#### 1 はじめに

##### (1) 離婚の実情

戦後の復興期を過ぎた昭和40年頃から日本での離婚は増加傾向にあり、バブル期には一時減少したものの増加傾向が続いてきた。平成14年には離婚件数は280,836件となり、平成15年、16年は幾分減少して平成16年には267,000件となっている。このうち同居期間5年未満の夫婦が約40%、10年未満では半数を超えており、年齢で見ると10代から30代の夫婦の離婚が多く、子どものある夫婦の離婚は約6割を占めており

(厚生労働省「人口動態統計」による)、離婚の増加に伴って、親の離婚を経験している子どもも増えている。

日本での離婚の方法は協議離婚、調停離婚、審判離婚、裁判離婚とあるが、夫婦双方が合意すれば届を出すだけで認められる協議離婚が最も多く、約90%を占めている。夫婦の一方が離婚や離婚の条件に納得できなければ家庭裁判所に調停の申立をし、そこで合意に至って離婚が成立する調停離婚が約8%である。協議離婚では離婚の理由や原因は不明であるが、家庭裁判

所に調停の申立をする際の動機をみると、夫も妻も、「性格が合わない」が最も多く、次いで「異性関係」となっている。妻の理由では暴力や生活費、精神的虐待などが挙げられているが、「お互いに性格が合わない」、「愛情が感じられなくなった」などの理由で、より自分らしく生きるための再出発として離婚を求める夫婦の姿が見られる。

未成年者の子どもがいる場合には夫と妻のどちらが親権者となるかを決めなければ離婚はできない。戦後は、子どもは「家の子」として世継ぎとみなされていたことや母親が引き取っても経済的に養育が困難であったことなどから、夫が親権者になることが多かったが、女性の社会進出が進んだこと、福祉政策の充実などを受けて、1965年以降は母親が親権者となることが増え続け、子ども達の約8割は母親に引き取られている(厚生統計協会)。しかし、離婚に際して、夫婦のどちらが親権者になるのか、どちらが子どもを引き取って養育するのかを決めるときには、争いは深刻化している。

離婚は夫婦にとって大きな危機であるが、子どもにとっても成長過程で遭遇した父母の離婚は、単に養育環境の変化というだけにとどまらない。父母の離婚を、子ども達はどのように体験し、受けとめているのか、そして、その後の子どもの成長にどのような影響を与えているのかなど大きな課題である。離婚に際しては、子どもは何らかの喪失・苦痛・被害を受ける立場にありながら、「影の存在」として扱われ、子ども自身が気持ちを述べたりする機会もなく、夫婦関係の摩擦・緊張・不和・冷戦・別居・離婚というプロセスを息を殺して見つめ、時には交渉の駆け引きや綱引きの道具とされることすらあるのが実情である。家庭の維持・再生か、離別・解体かの人生の岐路に立たされながら、子どもは非力な立場に置かれており、「子は鎧」と

はならない経過を辿ることになる。

子どもが体験した親の離婚は、育児機能の混乱、経済水準の低下をもたらし、非行や引きこもりなどの問題行動が起りやすいなど、主として影の部分への危惧が大きく取り上げられ、そのことが離婚そのものへの危惧や偏見の素地になってきた。しかし、離婚体験を通して得たものは失ったものを上回ることもありうるし、その試練をとおして人間としてより強く、成長することもできる。親の離婚という出来事を、子どもはどのように評価し、どのように乗り越えようとしてきたのか、さらに痛手を軽減したり、困難を克服するためにはどのようなことが求められているのかが重要なこととなる。

## (2) これまでの研究

離婚先進国と言われ、高い離婚率を示すアメリカでは、家庭崩壊に遭遇した子どもの心理障害や社会的不適応が社会問題化し、親が離婚した子どもの精神状態や親子関係に焦点を当てた調査研究がなされている。1978年に、心理臨床家である J. S. ワラーシュタインと J. B. ケリーは、カリフォルニア州北部に住む、離婚した未成年の子どもをもつ60組の夫婦とその131人の学齢前の子どもに焦点をあて、その子ども達のもつ資質や親子関係・監護環境等を分析した「離婚を乗り切る子どもたち」と題する論文を発表している。

1970年代は、アメリカの各州では有責主義から破綻主義に離婚法の改正が行われ、やがて欧州各国にも破綻主義が及ぼうとする時期であった。ワラーシュタインはこの調査の18ヶ月後、さらに5年後、10年後、25年後と25年間に亘って追跡調査を行っている。その結果によると、離婚が子どもに与える影響は長期に及び、親の離婚から20年以上経過して成人期に達している子ども達にも深刻な心理的影響が認められたとされている。多くの子どもが異性との恋愛や親密

な関係の形成が課題となる時期に親の離婚の影響が現れ、親と同じように別れていたり、別れを繰り返しているものが多かったという。

離婚が子どもに与える影響について種々の調査・研究を踏まえて、アメリカの離婚法は単独親権から共同親権に、さらに離婚後の子どもとの面接交流など様々な改善が行われてきている。

日本では、離婚した親については、近年、様々の研究で取り上げられているが、親の離婚を経験した子どもに関しては、池田由子や棚瀬一代らが親の離婚が子どもにもたらす影響について考察しているものの、調査研究は殆ど着手されていない実情にある。小田切紀子は、2000年から2002年にかけて離婚をした父親13人、母親39人に調査するとともに、子ども11人に調査して考察し、『離婚を乗り越えるー離婚家庭への支援をめざしてー』にまとめている。

## 2 調査の目的

わが国での離婚の実情、親の離婚を経験した子どもが増えているにもかかわらず、そうした子どもについて調査研究が殆んどなされていない実情を踏まえて、親の離婚が子どもにどのような影響を与えているのか、子どもは親の離婚をどのように受けとめているのか、子どもが受けとめている親の離婚のプラスとマイナス、そして子どもはどのようにして親の離婚を乗り越えようとしているのか、子どもは親や社会に何を求めているのかについて調査を実施した。

本研究は、家庭問題を専門的に援助している社団法人家庭問題情報センターが独立行政法人福祉医療機構の助成を受けて、離婚による養育環境の変化が子どもの成長にもたらす影響について、親と子どもに調査を実施したものの一部であり、筆者が担当した子どもの調査結果を報告書にまとめ、更に第24回日本心理臨床学会で発表したものに、加筆してまとめたものである。

## 3 調査

平成15年10月に18歳から22歳までの女子大学生65人に実施した予備調査を踏まえて本調査を実施した。

### (1) 調査期間

平成16年6月～同年10月末日まで

### (2) 調査対象者

対象者は、①家庭問題情報センターのホームページに掲載した調査対象者としての協力要請、②朝日新聞及び日本経済新聞での研究紹介、③親権者指定に関する民事鑑定を行った鑑定人の紹介などを通じて、調査研究の趣旨を知り、調査への協力を申し出た人で、子どもとして親の離婚を経験した人96人である。

なお、親として離婚を経験した人からの調査協力者は101人であったことを付記しておく。

### (3) 調査事項

調査事項は、①親の離婚、②親の離婚後の生活等、③同居していない親との交流、養育費、④親の離婚についての考えなどである。

### (4) 調査の方法

調査票への回答による方法と面接調査による方法で、いずれを採るかは調査協力者の意向に従った。調査用紙への回答は、家庭問題情報センターのホームページへの書込み、又は郵送によった。面接調査は筆者及び家庭問題情報センターの会員で、臨床心理士又は専門的な教育を受けている者で、原則として2名で行った。

調査方法		子としての立場		親としての立場		合計
		男性	女性	男性	女性	
面接	鑑 定	3	1	4	4	12
	希望者	5	17	4	18	44
郵 送		0	7	1	11	19
インターネット		13	50	12	47	122
合 計		21	75	21	80	197

## （５） まとめの方法

数量的な分析を行うと共に、質的分析を中心として取りまとめた。

## ４ 調査結果

### （１） 回答者の実情

現在の年齢

子の年齢構成	男性	女性	合計
10代	8	12	20
20代	9	24	33
30代	3	18	21
40代	1	12	13
50代	0	3	3
60代以上	0	6	6
合 計	21	75	96

離婚時の年齢

離婚時の年齢	人数
1～5歳	19
6～9歳	23
10～12歳	23
13～15歳	10
16～19歳	14
20歳以上	7
合 計	96

離婚後の経過年数

離婚後の年数	男性	女性	合計
5年以下	7	10	17
6～10年	2	10	12
11～15年	5	7	12
16～20年	4	10	14
21～25年	1	10	11
26年以上	2	28	30
合 計	21	75	96

## （２） 回答結果

ア 親などから離婚の説明があったか

離婚の説明の有無	人数
親から説明があった	70
親以外（祖父母・親戚・裁判所など）から説明があった	7
説明がなかった	17
不明・無回答	2
合 計	96

イ 誰から説明を受けたか

一親から説明を受けた70人の内訳

説明した親	人数
同居している親	51
同居していない親	7
父母双方から	10
不明・無回答	2

ウ 離婚について子どもの意見の聴取と意見

		賛成	反対	その他	無回答
聞か れた	言えた	20	2	1	4
	言えず	0	1	2	0
聞かれない		4	1	3	51
無回答		0	0	0	7
合 計		24	4	6	62

エ 面会交流

		あり	なし	無回答	合計
監護親	父	8	8	1	17
	母	41	27	2	70
	小計	49	35	3	87
父母以外		0	1	1	2
独立・成人		7	0	0	7
合 計		56	36	4	96

## ５ 考察—離婚についての子どもの思い

### （１） 事例から

事例１ 「説明もせず、出て行くなんて！」

(離婚時15歳、現在40代女性)

小学校時に父親が失業し、母親が仕事に出て、休日にも家にいないことが多く、父母の仲が悪くなった。高1の夏休み前、朝父母が喧嘩をし、母が何も持たずに出て行き、二度と戻らなかった。15歳だったのに、何の説明もなく、意見も聞かれず、母は突然家を出た。離婚しないでよかった。一人っ子で話す相手がなくて、机の下で泣いていた。3年後に母から会いたいと言ってきたが、謝罪もなく、拒否した。母から捨てられたという思いを消せず、私は駄目なんだと思い、引け目を感じるようになった。父子家庭で就職時もハンディがあった。親友以外には言えなかった。捨てられた思いはどんなに穴埋めされても埋められず、一生消えない。

事例2 「母に離婚を勧めたが、傷は癒えない」

(離婚時18歳、現在40代女性)

父は飲酒と母への暴力があり、子どもは怯えて暮らしていた。このままでは母が殺されるのではないかと心配で、早く離婚してよかった。高校入学時に私一人母の実家に行った。母も1年後に来て、卒業時に離婚した。母は決心がつかない様子でいたので、私が母に離婚を勧めた。離婚は当然と思っていたが、友達には隠していたので、親や家庭のことが話題になるのを避けていた。「親が離婚しているから」、「母子家庭だから」と言われぬようにいつも気を張り、後ろ指を指されないように頑張っていた。

離婚後父とは会っていない。父を怖い人と思い、会うことはなかったが、自分が親になって、父の生い立ちを考え、気の毒な育ち方をした人と思うようになり、自分のルーツとして父の生き方を詳しく知りたいと思うようになった。子どもから祖父のことを聞かれるが、話せないでいる。

事例3 「離婚！冗談！本当？」

(離婚時11歳、現在10代男児)

離婚のかなり前から母から離婚するかもと聞いていたが、冗談だろうと思っていた。引越屋が来て、本当に引越するのだと思った。離婚しないでほしいことを言ったが聞いてもらえなかった。離婚しないでよかった。父は涙もろくなった。親の離婚でいいことなんて一つもない。

子どもの思いをまとめると、①自分も家族の一員であり、当事者の一人ということを忘れないでほしい。親が勝手に決めないでほしい。きちんと説明してほしい。②「言わないけど察してほしい」という姿勢に逃げこまないでほしい。③転校しなくてすむか等、離婚によって予想される生活の変化について聞きたい。野球、サッカー、友達、習い事がどうなるか知りたい。④単に「別れることになった」という結論だけでなく、父母がどういう話し合いをしたか、それぞれがどういう考えでこうなったかを、親になった責任を果たす意味でも説明してほしいということになる。

「子どもが生活している世界」としての生活環境の変化は親が思っている以上に子どもにとっては重要なことであり、非常に辛いことであることが窺える。

意見を聞かれて、はっきりと自分の意見を言う子どもがいるが、自由に意見を言える雰囲気ではないこと、「自分が何か言うことで、離婚やどちらの親と住むかが決まってしまうのではないか」という責任の重さに何も言えなくなっている子どももあり、離婚後1年しか経過していない人も、20年、30年以上経過している人も、親の離婚による混乱と痛手は変わらず、子どもはどのように考えればいいのかわからない、困惑しているという心情でいる。

親は、こうした親の離婚についての子どもの思いをしっかりと受けとめ、「離婚は親の責任であること」、「どんなことがあっても子どもを愛

していること」、「離婚しても一生親子であること」、「会いたければ会えること」をはっきりと子どもに伝えることが必要である。

## (2) 離婚に対する意見

離婚に対する考え	離婚時(%)	現在(%)
離婚してよかった	19 (20)	30 (31)
離婚は仕方がない	24 (25)	34 (36)
離婚してほしくなかった	30 (31)	16 (17)
分からない・その他	17 (18)	10 (10)
無回答	6 (6)	6 (6)

親の離婚を子どもはどのように受けとめているかについて、離婚当時と現在と比較すると、次のようにまとめられる。離婚当時は「離婚してよかった」と回答している子どもが20%、「離婚は仕方がなかった」と回答している子どもが25%であったのが、現在ではそれぞれ10%程度増え、逆に「離婚してほしくなかった」と回答している子どもが31%から17%に、「分からない・その他」と回答している子どもは18%であったのが10%に減少している。

離婚当時には、「離婚してほしくなかった」「分からない」と回答している子どもが49%であったのが、現在では27%に減少し、現在の心境として「離婚は仕方がなかった」「離婚してよかった」と回答し、離婚を受け入れ、肯定している子どもは67%に達している。

この数字に示されている離婚当時と現在との離婚に対する受けとめ方の変化は、離婚当時のショック、今後どうなるのか分からないという将来の見通しが不明で、不安な状態から、ある年月を経て家庭状況の変化や新しい環境に適応し、現実を受け入れ、肯定することで現在の自分を受け入れようとしていることが理解できる。苦しみながらも、新しい環境への適応を通して獲得した成長がこの変化をもたらしていると言

える。

## (3) 「子どものために離婚すべきではない」という意見について子どもはどう考えているか

離婚についての意見	子どもの回答
離婚すべきではない	14 (15%)
離婚すべきでないとは言えない	42 (44%)
どちらとも言えない	36 (38%)
無回答	4 (4%)

子どもの15%が子どものために「離婚すべきではない」と回答し、44%の子どもが「離婚すべきではないとは言えない」と回答している。子どもは離婚について肯定し、受け入れていると思われる。しかし、「どちらとも言えない」と回答している子どもが38%もいることは、肯定も否定もできないという複雑な心情を反映していると思われる。

具体的にどのような意見を記載しているかについて整理すると次のようになる。

離婚についての考え方
「離婚すべきではないという考え方」に賛成 15%
自分の存在感が不明になる 父親と母親がいることが自分の存在を実感することが出来る。何故自分は生まれたのかという悩みを抱かないですむ。
子どものため 子どもが可愛そう。両親がいることは子どもの心の安定になる。
親としての責任 親としての責任がある。片親ではできないことがある。片親では取り返しがつかないことがある。
その他 人間不信になる。結婚・出産・離婚などすべて自分の思う通りにするという風潮に流されてほしくない。

<p>「離婚すべきではない」とは思わない 44%</p>	<p>どちらとも言えない 38%</p>
<p>両親の不和はつらい</p> <p>暴力など凄惨な状態が続くなら離婚した方がいい。不和・日常的な喧嘩を見ているのは辛い。不和の両親の下で育つことは子どもに良くない。子どもが不条理な恐怖を感じる家庭ではよくない。崩壊家庭で育つのは良くない。円満でないのは辛い。</p>	<p>自分の存在感</p> <p>自分がいるのはお父さんとお母さんが結婚したからである。離婚してしまうと自分がわからなくなる。</p>
<p>離婚した方がいい</p> <p>借金・ギャンブルなど子どもの手本になっていない親であれば離婚もやむを得ない。激しい喧嘩を子どもの前でするなら離婚した方がいい。離婚後の方が親や兄弟との仲がよかった。仲が悪いなら反って子どもが迷惑する。愛情のない家庭で育っても子どもの精神衛生上良くない。母の人生や自分の体験から離婚で家族が幸せになることが出来る可能性があることを知ったから。離婚せずに悪影響があるより、離婚した方がよいことがある。冷め切った会話を聞かされ、体裁を気にしているよりも良い。離婚も自分には成長のステップになった。離婚は決して後ろ向きの選択ではない。</p>	<p>離婚は親の人生</p> <p>離婚には子どもには分らないことがあると思うので。子どもにはかなりマイナスだが親の離婚は親の人生。子どもの為だけに生きる必要はない。</p>
<p>親には親の人生がある</p> <p>母親には母親の人生がある。一人の人権を守るためには離婚もやむを得ない。親の人生があるので子どもに縛られて人生を選択するのは不幸。子どもの為に親の人生を犠牲にすることはない。離婚するのは自由であり、否定する気持ちはない。子どもの為に離婚しないでいられるのは子どもにとっては迷惑。責任を子どもに押し付けないで自分で選択して決めるべき。</p>	<p>離婚した方が良い</p> <p>暴力から解放される。親の喧嘩や争いを見るのは辛くていや。親の不和は耐えがたい。子どものために離婚した方がいい場合もある。両親がいなくても幸せになれるから。父親との交流や養育費の支払いを受け、社会人として成長した。</p>
<p>親の幸せは子どもの幸せ</p> <p>親自身が幸せでなければ子どもも幸せになれないから。親が元気で幸せな生活をしていれば子どもも幸せになるから。父母が争う声に不安だったが、離婚後はそういうことがなくなった。無理して別れないでいることは子どもには辛い。</p>	<p>子どものために我慢して</p> <p>愛のない結婚は辛いかもしれないが、子どもが親の犠牲になる。子どものためにある程度は我慢してほしい。</p>
<p>その他</p> <p>それぞれに色々な事情がある。</p>	<p>その他</p> <p>「普通の家族」がどんなものか、男女がどう振舞っているのか分からない。父親としてどうあったらいいのかわからない。離婚するのであれば子どもが希望する時期に合せてほしい。両親が居る家庭に憧れている。家庭不和の中で育つか、片親で寂しい思いをするのかどちらがいいのか。夫々の家庭の事情は異なるから。</p> <p>「離婚して良かった」「離婚すべきではないとは考えない」という子どもには、離婚前の冷たい夫婦関係、夫婦喧嘩、飲酒、DV、借金取りなどの不安定で、機能不全に陥っている家庭生活から解放された安堵感があり、たとえ、経済的には苦しくなっても、寂しくなっても、安心して家に帰れる状態になって、ほっとしている心情が述べられている。その意味で離婚を肯定しているといえる。</p>

「どちらとも言えない」と回答している子どもが記載している内容をみると、「親の不和は耐えがたい」「社会人として成長した」と離婚を肯定し、離婚は親の人生だからと考えて、自分にとっても良かったと述べている一方で、「愛のない結婚はつらいかもしれないが、子どもの為には離婚を我慢してほしい」「せめて離婚の時期は子どもが納得する時期にしてほしい」「犠牲になるのは子どもだ」という回答、「普通の家庭、普通の男女関係が分らない」「父親がどういうものがわからない」という回答、「両親の離婚によって自分は何故生まれてきたのかわからない」「片親では出来ないこと、取り返しがつかないことがある」という切ない子どもの気持ちや家庭がわからないので将来の家庭像が描けないという不安などが回答されていることから、離婚は親の問題であると同時に子どもにとっても大きな問題であるといえる。

#### (4) 親の離婚のプラス・マイナスについて ア プラスと思うこと・良かったこと

子ども達は親の離婚をどのように受けとめ、どのような体験をしているのかについて、離婚による得失―プラスとマイナスを中心に、調査結果をまとめ、考察したい。

自分自身について
しっかりした。自立した。強くなった。自分で解決する力をつけた。勉強で頑張った。自分で解決する力をつけた。成長した。母親に心配かけないようにした。人から言われないように気を遣った。ハングリー精神で頑張った。
他者との関係について
人の痛みや優しさが分る。他人の立場を考える。他の人に気を配る。物事を深く考える。人生の意義を考える。プラス思考をする。いろいろな人生があることを理解する。
家族について

母が明るくなる。母が殴られる心配がなくなる。家族が親密になる。両親の不和を見なくてすむ。ピリピリとした生活から開放される。両親を一人の人間としてみることができる。家族の大切さに気付く。

親の離婚について良かったこととして、年齢を問わず、多くの子ども達は、離婚後は「家庭が明るくなった」、「母親が殴られたりするのを見なくてすみ、安心して家に帰ることができるようになった」というように、家庭が安全で、安心な場となっていることを挙げている。また、自分自身については「頑張った」「強くなった」と述べ、離婚という環境の変化を受けて強くなり、「離婚家庭の子どもと後ろ指を指されないように」あるいは「母親に心配かけないように」と、逆境を乗り越えようと努めている姿が浮かんてくる。それと共に、他者との関係では「人の痛みや優しさを感じ取り、わかるようになった」「人生の意義を考えるようになった」など、人としての生き方や生き様、在り様について考えるようになったと述べ、人としての成長の体験として受けとめているといえる。

#### イ マイナスと思うこと・つらかったこと

自分自身について
進学を諦めた。進路変更をせざるを得なかった。不安・孤独・どうしようもない寂しさに苦しんだ。自分の存在は何だったのか苦しんだ。嘘をつかなければならない場面が多くなり、心身が疲れた。自己嫌悪や被害感に苦しんだ。自分の存在場所がない。自分は何か他の人とは違う。虚無感、不安神経症・神経衰弱になり、医療機関に雇った。今家庭をもっても離婚のトラウマがぬぐえない現実で苦しんでいる。
友人関係
離婚後学校で友達と明るく家庭のことが話せない。無邪気さのない「陰のある」子になった。親の離婚について話せず、家族や親の話題になると身を引いてしまっていた。



親の離婚について訊ねられるのが嫌だった。	
対人関係	自分のことを開けっぴろげに何でも話すことが出来なくなった。余り他人に深入りされたくない自分で殻を作ってしまうようになった。人が信じられなくなった。大人不信になった。人との衝突をさけるようになった
家庭関係	家庭や父親、母親というものが分らない。両親が揃っている雰囲気分らない。実家がない。頼れない。将来結婚しても離婚してしまうのではないかと不安。結婚しても母親になる気になれない。子どもが生まれて、ママ友達に「実家はどこ？」と聞かれると憂鬱になる。
社会関係	父なし子、片輪者、半端者と言っていじめられた。就職の内定が母子家庭ということで取り消された。離婚家庭の子は欠陥があるように見られて涙を流した。親が離婚したことで「正しくない家庭」と世間的に見られ辛かった。交際相手の親から親の離婚について聞かれ辛かった。相手の親の意見で、結婚が取り消しになった。親やきょうだいと姓が違い、病院などで色々聞かれた。励ましのつもりとは思いますが、複雑な家庭なのに頑張っていると級友の前で先生に言われて辛かった。

親の離婚によるマイナスとして、不安・孤独・寂しさに苦しみ、苦しむ自分を責めて自己嫌悪に悩み、被害感に悩んでいるなどの訴えが多い。心身ともに疲れ、そのために追い詰められ、精神的に不安定になって自殺を図ったり、精神科を受診し、治療を受けたりしている者もある。

「羽が片方折れているような気持ちを抱えている」、「親の離婚は成人していても悲しいことでした。夫婦が傷つけ合い、子どもに悪影響を与えるならば別れて暮らした方がいい場合もあ

るかもしれませんが、子どもにとって親の離婚はそれ以上に心に深く傷つくことだと思います」（離婚時24歳、現在34歳）、「親に心配をかけないようにしっかりといい子どもを演じてきました。本当の弱い自分を異性に素直に見せることが出来ず、永遠に続くものはないと、一生結婚もせず、子どもも産まない人生を考えてきました。別れてしまうのが怖かった。いずれは別れがくるものと決めつけていましたから…」（離婚時7歳、現在32歳）、「親が離婚すると決まって数ヶ月は不安神経症になり、心療内科に通った。カウンセリングを受けて、親は私とは別人格の大人で夫々の事情があると少しずつ理解できるようになった。」（離婚時21歳、現在23歳）というように、親の離婚時に幼かった人も成人となっていた人も、また離婚後何年経過していても、親の離婚は子どもの心に大きな傷跡を残している。しかし、「まだ完全に親を許しません。出来ることなら夢であってほしい。他人の幸せな家庭を見るとどうして私だけが…と思うこともある。でも、迷いの中から新しい自分を発見する時、人はもっと強くなれるのだと思います。…明けない夜はありません。夜明け前はどんなに暗くても、いつか光がさすのでしよう…」（離婚時21歳、現在23歳）という言葉にあるように、子ども達は苦しさの中にあっても、苦しみから抜け出そうと努めている。

離婚について子どもが最も大きなマイナスと考える傷や悩みは自己感の傷つきや喪失であり、それは他者との関係や社会との関係へ発展していく。父親と母親がいて、父親と母親が愛し合うことによって自分が生まれたということ、自分は父親と母親に愛される存在であると実感することを通して自己感が芽生え、さらに日常生活を共にすることを通して、自己を確たる存在として実感できるようになるのだが、両親との生活体験を失うことにより、自己の存在の足場

を失い、自分の誕生は何だったのかという自己喪失感に苦しむことになる。自己喪失感は友達との関係に溝を感じることであり、それが他者との関係に、さらには社会との関係に広がり、深刻化していく。自分の家庭は、「父親と母親がいる普通の家庭ではない」と感じるのが、自分は「普通の人間」ではないのではないかという悩みに発展していくのである。この背景には「離婚家庭は正常ではない」、「父なし子」「片輪者」という社会の目や偏見がある。

「正直、社会の偏見は今だにあります。自分の努力ではどうにもならないことであれこれ言われることは本当に辛い」「離婚というのは普通の家庭にはない、とても恥ずかしいことだと思っていたので、正直に両親の離婚を話せず、嘘をついてしまい、それが積み重なってくると嘘をついた罪悪感が増えてとても苦痛だった」(離婚時8歳、現在30歳女性)と述べている。

両親の離婚後、母親と暮らした女性(離婚時17歳、現在34歳)は、「離婚当時は離婚してほしくなかった。親しい友達に親が離婚したことは言えず、誰にも相談せず自分で解決するようにしてきた。」と言っているが、「両親が離婚していなかったら、私はもっとわがままで、一人ではなにも出来ないような人になっていたように思う。不安ながら一人で頑張ってきて強くなったと思う。その意味では両親が離婚したことがプラスになっていると思う。」と述べ、苦しみながらも、両親の離婚を成長のステップとして受けとめている。

#### (5) 離婚した父親・母親に求めていること

96人の子どものうち、離婚後父親と暮らした者16人、母親と暮らした者70人であったが、離婚という現実を子どもなりに理解しようと努めている子ども達は離婚した父親・母親に対してどのようなことを考え、何を期待し、何を求めているのかについて、考察したい。

#### ア 父親に求めていること

最も多いのが「養育費・学費などの金銭的援助」であり、次いで「面会交流など離婚後の関わり」である。「離婚後も弱音を吐かず、尊敬できる親として生きていてほしい」という回答もある。

#### イ 母親に求めていること

「よく頑張っているし、今のままで十分」とする回答が最も多いが、「投げやりになったり、子どもに依存したりしないで、しっかり生きていてほしい」と回答する子どもが多い。母親の苦労を理解した上で、なお親役割をしっかりと担ってほしい、甘えさせてほしいという子どもの気持ちが述べられている。

子ども達は、心を痛めながら、両親の離婚を受けとめ、父親、母親それぞれに気遣っている。それだけに、父親、母親双方離婚した親が相手の悪口をいうことには耐えられない思いでいる。相手の悪口は自分に流れている血の否定と子どもは受けとめ、自己肯定感や自己存在感が否定されていると感じているのである。そして、何よりも、子どもの心の傷に気づいてほしいと願っている。

それと同時に、父親、母親双方に求めていることは、それぞれがその「人生を精一杯生きていってもらいたい」ということであり、たとえば会うことが出来なくても、「頑張っていてほしい」と願っている。その気持ちが「いつか親に会った時にこんな風に自分も頑張ってきたと言えるように生きていきたい」という思いとなって、親の離婚を受けとめ、乗り越えていく力となっているのである。

#### (6) 子どもは親の離婚をどう乗り越えてきたか

子ども達は、どのように親の離婚を乗り越えてきたのか、当時の思いを振り返って回答してもらった内容を整理すると、次のようにまとめ

られる。

具体的内容	
自分で解決してきた	35人
自分との対話。自分を見つめた。ありのままの自分を受け入れた。日記を書いた。自分に言い聞かせた。胸の中に納めるようにした。我慢した。しっかりするように自分に言い聞かせた。思いっきり泣いた。集中力を鍛えた。向上心をもった。宗教書など本を読んだ。	
友達と話した	15人
同じ環境の友達と話した。友達に励まされた。	
人と話した	10人
祖父母、きょうだい、恋人など色々な人と話して解決した。	
考えないようにした（否認）	12人
思い出さないようにした。心に封印した。	
打ち込んだ（躁的防衛）	7人
部活、趣味など夢中になれるもの、楽しいことに打ち込んだ。忙しくした。何か打ち込めるものが大事。	
専門家による援助	5人
カウンセラー、精神科医と話し、治療を受けた。	
時間が解決した	4人
あきらめた	4人
その他	2人
良い子を演じた。親に反抗した。	
解決していない	5人

自分の体験を踏まえて、今後親が離婚しようとしている子どもへのアドバイスとして以下のような助言を挙げている。具体的なアドバイスを見ると次のようにまとめられる。

アドバイス
自分自身について

自分を卑下しないで。一つの経験、ステップ、バネとして成長してほしい。自分を責めないで。自分を大切に。自分の気持ちを大切に。しっかり考え、強くなってほしい。自分の道をしっかりみつめてほしい。前向きに。プラス思考をして頑張る。自分の力を信じて。自分の弱さを出して。無理に良い子をしないように。

#### 離婚について

離婚ははずかしいことではない。離婚は親の問題であって、子どもは悪くない。別れた方がいいこともある。いろいろな家庭、いろいろな人生があることを考えて。

#### 親について

離婚していても、父親・母親であることは変わらない。親の愛情を信じて。親との絆を深めて。親を恨み気持ちが出てくると思うけれども親を信じて乗り切って。子どものことを一番に考えていても別れることはある。子が努力しても親は戻らないことを受けとめて。親には親の人生があることをわかって。親は完全な人ではない。親に、自分の意見や言いたいことは我慢せずに言うこと。言わないでよくなることはないし、後で後悔することになる。たとえ受け入れられなくても粘り強く自分の意見や不満は親に伝えた方がいい。

#### 悩みの解決について

時間が解決してくれる。きっと良い日がくることを信じて。

#### その他

相談できる人を作っておくように。一人じゃないよ。たくさん本を読んで。苦しい思いをした分だけ自分で生きる力がつく。

日記を書いたり、本を読んだり、自分に言い聞かせてきたりして自分で解決したという子ども、部活や趣味などに打ち込んだり、心に封印して考えないようにしたという子どもが最も多い。また、同じ環境の友達と出会い、祖父母・きょうだい・恋人等と話して解決したという子

どももいるが、カウンセラー・精神科医の治療を受けたという子どももいる。

### (7) 子どもが求めている援助

子どもは親の離婚を受けとめ、乗り越えるためにどのような援助を求めているのであろうか。

<b>経済的な援助</b>
学費などについての援助が必要。
<b>精神面への援助</b>
メンタル面についてカウンセラーに聞いてもらいたい。
<b>専門的な相談機関による援助</b>
離婚当事者と子どもをフォローする機関がほしい。具体的な解決はなくても家庭問題を話したり、相談したりできるバックアップシステムがほしい。弁護士など専門家に相談にのってもらいたい。
<b>自助グループ</b>
同じような体験の子どもとの交流をすることで心の中に閉じ込めていた痛みを放つことが出来るのではないか。気持ちが楽になるのではないかと。話すことが必要と実感している。

### ア 経済的援助—生活費、学費などの援助

両親が離婚して子どもが直面する問題として経済的な問題が大きい。子どもを引き取った母親は生活費や教育費のために就労するが、中には昼夜就労する母親もいる。離婚時に養育費の取り決めをしていない、取り決めの話し合いができないなど父親からの養育費の支払いがない家庭が多いが、父親から養育費が支払われていても、それだけで学費を賄うことはできず、養育費を取り決めていても、支払いが滞りがちになったり、中断してしまったりすることも多く、母親に引き取られた子ども達は高校、大学などへの進学を諦める、あるいは進学先を変更せざるを得ないことが多い。今回の調査で、子どもから離婚した父親への要望で最も多かったのが

経済的援助で、「養育費を毎月支払ってほしい」というものであった。制度として奨学金制度の充実を求める要望も寄せられている。

### イ 精神的な援助—話し相手・相談相手

親しい友達に両親が離婚したことを話せず、会話が家庭に触れることを避ける気持ちから友達関係が疎遠になってしまったと、友達との関係に苦しんでいる子どもが多い。多くの子どもは、親の離婚をどう受けとめたらいいのかと悩み、自分が悪いから両親が離婚したのではないかと罪悪感を抱き、今後どう生きていったらいいのかなどの悩みを抱えている。親は、離婚後の生活の立て直しや自分自身の気持ちの整理など精一杯で、心身共に疲れていて、時間的にも精神的にも、子どもと向き合い、話す余裕が乏しくなりがちである。このような親を気遣って親に悩みを打ち明けられず、苦しんでいる子どもからは「話を聞いてもらいたい」という要望が強い。

話し相手、相談相手として、子ども達が挙げているものを整理すると、次のように分けられる。第1は自助グループ、第2は親戚・知人・地域の人など身近な人、第3は専門家—スクールカウンセラー・カウンセラー・弁護士などとなる。

#### ① 自助グループ

同じ体験をしている子ども達と交流することで心の中に閉じ込めていた痛みを放つことが出来るのではないかと、話すことで気持ちが楽になるのではないかと述べ、胸の内を心置きなく話すことができる相手を求めている。

#### ② 親戚・知人・地域の人

離婚を知っている祖父母、おじ・おば、いとこ、近所の人などが、話し相手・相談相手として、黙って見守ってくれていて、何かの折に話し相手になってくれ、そういう人が自分の身近にいてことで気持ちが支えられたという回答を

寄せている。

### ③ 専門家—スクールカウンセラー・弁護士等

空気のように感じていた両親（父親・母親）を失い、安心と安全を失った子ども、親に捨てられたのではないかと、子どもへの愛情がないから離婚したのではないかと悩み、自己肯定感や自尊感情が揺らぎ、罪悪感に悩んでいる子どもは、心理の専門家であるカウンセラーに話を聞いてもらいたい、自己存在感を取り戻したいと訴えており、専門家によるケアを求めている。会いたくても会えない親との交流や養育費の問題などについては弁護士などの専門家に相談したいという声もある。自殺企図や神経症に悩んで心療内科や精神科などの医療機関に罹り、服薬や心理療法を受けている子どももいる。

「当事者や子どもをフォローする機関がほしい」「具体的な解決はなくても家庭問題を話したり、相談したりできるようなバックアップシステムを考えて欲しい」という声が強い。比較的若い年齢層では学校の教師やスクールカウンセラーに支えてもらっているという回答があり、親からは全校にスクールカウンセラーを配置してもらいたいという声もあり、こうした立場の人が積極的に受け皿になることが求められているといえる。

## 6 まとめ

親の離婚を経験した子どもが親の離婚をどのように受けとめ、どのように乗り越えてきたのか、どのような援助を求めているか、さらに子どもにはどのような社会的援助が必要であるかについて、回答結果を整理してきたが、親の調査結果も加えて考察し、まとめとしたい。

### （１）親と子の離婚についての考えについて

子どもの回答を見てきたが、親は離婚についてどう考えているのか、親と子の回答を比較し

て考察したい。

「離婚すべきではない」という意見	子ども	親	合計
離婚すべきではない	14	7	21
そうとは言えない	42	69	111
どちらとも言えない	36	17	53
無 回 答	4	7	12
合 計	96	101	197

この結果は、同じ家庭の親子ではないので、同じ環境や条件の親子の認識として比較することはできないが、その点を踏まえて検討してみたい。

親と子で差が見られるのは、「子どものために離婚すべきではない」と考える者が子どもの方によく（親7%・子15%）、逆に「離婚してはいけないとは言えない」と考える者が親の方が多くなっている（親68%・子44%）。この結果からは次のようなことが考えられる。

親は、親子双方にとって離婚が必要であると考えて離婚を決断するが、子どもは、心の準備ができておらず、できれば別れてほしくないという気持ちでいる、ということが言えよう。しかし、その後、父母の諍いやその情緒的混乱に巻き込まれず、安定した生活できるようになり、また一緒に暮らしている親が一生懸命に生活する姿を見るという時間的な経過を経て、徐々に現実が受け入れられるようになっていくのであろう。

このことは、「親の離婚について子どもはどのように考え、受けとめているか」で、離婚当時は「離婚してほしくなかった」と回答していた子ども、「分からない」と回答している子どもが、時間の経過と共に減少し、逆に「離婚して良かった」（20→31%）、「離婚は仕方なかった」（25→36%）という受けとめ方に変っていくという経過とも関連している。

親は、父母が離婚することによって、一人親家庭になってしまうことを心配する。しかし、父母はもはや夫婦として関係を維持していくことは相当に困難になってきており、夫婦として離婚すべきか、子どもの父母として何とか繋がっていく努力をしてみるかという葛藤状態に陥る。夫婦関係が破綻してしまった状態で、離婚を決断するほか方法はなくなってしまっているときの家庭を考えると、無理をして夫婦関係を維持するには心身が限界状態になっていたり、緊張していて暗い雰囲気の家生活になってしまっていたりする。家庭内離婚のような仮面夫婦の状態になっている場合もあるし、暴力やアルコール依存やギャンブル依存などの嗜癖状態が起こっている場合もある。

このように明らかに無理のある状態を続けることは夫婦双方ともに不可能であるし、子ども達にも余計な気を遣わせてしまい、大きなストレスを感じさせてしまう。このようなときに母親は心身ともに疲れ果てて、心身の症状が出たり、子どもに八つ当たりしたりするような不適応状態が生じて、非常に苦しい状態になっている。しかし離婚をすることで、子どもは父親と一緒に生活できなくなり、さらに母親は経済的に自立していかなければならないという大きな課題を課せられるのである。

多くの母親は、自分自身と共に子どもたちにも相当に厳しいことを心配しつつ、離婚を決断する。そして、夫婦が離婚して、分れて生活することで、これまでのしかかっていたストレスが無くなることで元気が出て、子どもとの関係も安定していくと考えている。母親が離婚に踏み切ることで、夫婦の陰悪な関係に巻き込まれていた子どもはこれまでのストレスから解放される。そして、離婚に踏み切り、女手一つで子ども達を育ててくれる母親を助けるべくがんばる。母親と一緒に離婚家庭に対する社会的な偏

見や蔑視にも負けないようにしっかりとがんばり、その過程で色々な人や生き方があることや他者への優しさを知り、幅の広さや柔軟性など人間的な成長を獲得していくのである。

母親は、一度離婚を決めたら、振り返らず、前向きに生きていくことになる。このときには母親の自立心と共に子ども達の自立心も芽生えていくことになる。離婚は、母親にとっても、子どもにとっても、様々な困難を伴うが、大きなチャレンジになるといえる。親の離婚が子どもにとってプラスをもたらすには子どものがんばりが期待されていることを忘れてはならない。

親の離婚によって、子どもが得るものがあるとはいえ、失うものや苦しみも大きい。両親の離婚によって、父親との生活を失うことになる子どもは、母親ほど割り切れない。お互い他人の関係の父母は別れられても、子どもは血の繋がった父との別れをそう容易には受けとめられない。いざ別れるとなると「父親像」というのは重みをもっており、自分の自己存在もゆるがすことにもなりかねないような、ある種の空虚感をもたらし、情緒不安定になる場合もある。しかし子どもは母親が楽になれるのであればという観点から、この現実を受けとめていくことが理解される。

## (2) まとめ

夫婦として、親として、離婚を選択する際に様々な苦しみを経験する。離婚に至るまでに数年、あるいは数十年という苦しい年月がかかる場合もある。夫婦間の話し合いでは解決せず、調停あるいは裁判という過程を経て離婚に至る場合もある。今回の調査では離婚を考え始めてから離婚までに2年以上の期間を要したという人が26%となっている。この間、子ども達は両親の葛藤や争いを息を殺して見守っている。子ども達はこれからの自分の生活はどうなるのか

という不安、自分は生まれてきて良かったのか、自分の為に両親は喧嘩をしているのではないかなどに悩み、ストレスにさらされている。そして、父親と母親に気遣いつつ、両親の離婚は仕方がないと受けとめようとしている。中には、離婚後も何とか両親と暮らせないかと思いつている子どももいる。

こうした離婚に伴う様々なストレス下にある子ども達が離婚を乗り越えるために何よりも必要なことは精神面へのケアである。「胸の内に抱えているものを誰かに聞いてもらいたい、話したい」という子ども達の声に向き合うという姿勢が何よりも必要である。離婚後、「保育園や幼稚園の保育士、学校の先生には事情を話し、密接な関わりをもつようにしている」という親が多いことから、子ども達と日頃接している教育関係者には子ども達の心を理解して話を聴くことが望まれる。その際に必要なことは、子どもを「そっと見守ること」であり、子ども達が話しやすい関係を構築していることである。「先生に話したことで助けられた」と現在50歳の女性が苦しかった高校時代を振り返っている一方で、「励ましのつもりか、先生が『複雑な家庭なのに頑張っている』と同級生に話したことで傷ついた」、「『父子家庭』という先生の一言で同級生からいじめを受け、不登校になった」との声があり、子どもの視点に立った配慮や援助が求められている。また、「スクールカウンセラーに支えてもらった」という高校生、「スクールカウンセラーを配置してもらいたい」との要望が親から出されている。最近学校に配置されるようになっているスクールカウンセラーは子ども達にとって欠かせない存在となっているといえる。

「離婚当事者や子ども達をフォローする機関がほしい」「具体的な解決はなくても家庭問題を話したり、相談したりできるバックアップシステムを考えてほしい」という声があり、身近な

ところに相談できる機関が求められている。

また、社会的支援として、学童保育や児童館などが充実すること、社会福祉協議会や民間の諸団体が開催している様々な活動情報を広く流し、参加しやすくすることも必要であろう。

アンケートには「親の離婚で受けた傷は消えるものではないし、乗り越えることが出来ない」という声がある一方で、「父母が離婚するときの不安は並大抵のことではない。その時に信頼できる先生、スクールカウンセラーなど、父母以外に話を聞いてくれる大人の存在がとても大切であると思う。そのような大人たちに、自分の不安な心の内を語ることは大きな支えになる。」という声も寄せられており、離婚を乗り越えるには社会で支えることが必要である。

今回の調査に寄せられた多くの子ども達の声、大人や社会は真摯にうけとめ、心して聴くことが必要であろう。最後に子どもの声を紹介したい。「捨てられた記憶は一生消えない。子どもの気持ちやすむまで待つてあげてほしい」、「離婚しても親の責任は続くのだということを初めて考えさせられた」、「両親が離婚していなかったら、自分はもっとわがままで、一人では何も出来ないような人になっていたように思う。大学生になって不安ながら一人暮らしを始め、その後も一人暮らしを続ける中で強くなったと思うので、その意味で親の離婚がプラスになっていると思う。その一方、離婚や家庭内暴力などのことを打ち上げられず家族に関する話題に触れられず、親友とも心から打ち解けられず、好きな人にも素直になれずにいたことはマイナス面だと思う。個人差もあると思うが、全く関係のない第三者がそのような悩みを聞いてくれるような機会があれば心強いのではないかなと思う」

## 7 今後の課題

調査に協力してくれた回答者の中に、これま

で親の離婚や離婚後の体験や離婚当時の苦しかった気持ちなど自分の苦渋体験を第三者に話すことができて、「胸のつかえたが取れた」、「気持ちの整理ができた」と謝辞を述べた人がいた。過去の悩み、苦しんだ場面を想起することは辛いことであったと思われるが、自分の中にわだかまっていたものを口にする事で、自分の過去を整理し、過去を乗り越えることが出来たということであろう。

離婚の増加に伴い、親の離婚を経験した子ども達が増加していること、そして子ども達が胸に抱えている痛みを受けとめ、そうした子ども達のこころをケアすることが必要であることを痛感させられた。そのためには出来るだけ多くの人に、子ども達のこころの声を届けることの必要を痛感させられた。

多様な価値観が交錯している、流動的な現在社会にあって、家族はその流れの真っ只中において揺れ続けている。親が混乱している状況の中で、子ども達は不安を抱えつつ、息を殺して見ているしかないのであろうか。今後の家族の姿がどうなっていくのか分かりにくい、多様な価値観をもった大人が形成する家族は多様な家族となることは間違いない。確実なことは、人は家族の中に生まれ、成長し、大人になっていくことである。であれば、社会は、そして私たちは、多様な家族を受けとめ、そこで成長する子どもを受け入れ、支えていかなければならない。

今後も離婚は増加すると思われるが、離婚する際には、なぜ離婚するのか、離婚は子どもが原因でないこと、離婚したら生活環境がどう変わるのかを子どもの年齢に合せて分かるように説明し、子どもの気持ちを十分に聴いて、配慮することが必要である。離婚原因がどうあろうと、子どもは別れて暮らす親への思いを胸に秘め、どちらの親からも愛されたいと願っている。た

とえ別れて暮らしても、両親が愛し合って生まれた子どもであり、生まれてきてよかったという思いをもち続けるには、親と子をつなぐ絆の一つとして、面会交流などの精神的支援と養育費の支払いなど経済的支援とが必要であることを、親は肝に銘じていることが求められている。

今回の調査に協力していただいた親の離婚を経験した子ども達からの要望を受けて、子ども達が自由に意見交換したり、大人や専門家から助言を受けたりすることが出来る場を提供したいと考え、インターネットを利用した意見交換の場の提供を試行している。また、離婚後別居親となった親と子どもとの交流を援助する活動を行っている。こうした活動を通して、親の離婚を経験した子ども達が自己喪失感の悩みを少しでも軽減し、トラウマとなることがないように援助活動を実施していることを付記しておきたい。

## 文献一覧

- Wallerstein, J. S. & Blakeslee, S. (1989) *Men, Women & Children A Decade After Divorce* 高橋早苗訳(1997)『セカンドチャンス 離婚後の人生』草思社
- Wallerstein, J. K (1990) 江副智子訳「重荷を背負わされすぎた子供：離婚の長期的影響」精神分析研究34(2)31-40頁
- Wallerstein, J. S. & Blakeslee, S. *The Unexpected Legacy of Divorce A 25 Year Landmark Study* 早野依子訳(2001)『それでも僕らは生きていく』PHP 出版
- Benedek, E.& Brown, P. C. *How To Help Your Child Overcome Your Divorce* 高田裕子訳(1999)『離婚しても子どもを幸せにする方法』日本評論社
- 円より子・現代家族問題研究所 (1985)『＜離婚の子ども＞レポート』(株)フジタ



- 篠田悦和他(1985)「子の監護紛争事件における「子の意思」の調査」調研紀要48号48-71頁
- 佐藤千裕(1985)「離婚を乗り切る子どもたち—最近のアメリカの調査研究から」ケース研究205号109-118頁
- 佐藤千裕(1987)「非監護親と子の面接交渉をめぐる諸問題」調研紀要52号109-118頁
- 清水順子(1988)「親の離婚が子に及ぼす影響—少年非行を通して」調研所報22号55-72頁
- 池田由子(1989)『引き裂かれた子どもたち』弘文堂
- 小此木啓吾(1991)「対象喪失と悲哀の仕事」精神分析研究34(5)294-322頁
- 藤本和男(1991)「子の奪い合い事件について」ケース研究187号33-40頁
- 佐藤千裕(1991)「調停と子どもの調査」ケース研究252号36-46
- 野村二郎(1992)「子の監護事件に見る子どもの姿と父母関係」調研紀要61号27-40頁
- 棚瀬一代(1994)「アメリカにおける離婚後の子の監護について」ケース研究236号33-37頁
- Maclean, Mavis 南方暁訳編(1995)「英国における離婚と子どもをめぐる近年の論議」ケース研究248号50-61頁
- 村本邦子(1997)『「しあわせ家族」という嘘』創元社
- 小此木啓吾(1997)『対象喪失 悲しむということ』中公新書
- 厚生統計協会(1997)「人口動態社会学経済面調査報告—離婚家庭の子ども」
- 野田愛子(1998)「親の離婚の子どもに及ぼす長期的影響—ワラストイン教授の研究から—」ケース研究256号2-14頁
- Liz(1998)「なぜ、わかれたのですか—特集 離婚、親の目の目」「リズ」Vol. 4 111-172頁
- 家庭問題情報センター(1999)『離婚後の親子の交流について—アンケート調査結果の概要』
- 小田切紀子(2000)「離婚した母親の家庭状況の類型から見た心理的適応」心理臨床学研究21(6)621-629頁
- 棚瀬一代「離婚の子どもに与える影響—事例分析を通して」京都女子大学現代社会研究19-37頁
- 棚瀬一代(2001)『虐待と離婚の心的外傷』朱鷺書房
- 家庭問題情報センター(2001)「親の離婚にゆれる子どものところと父親の役割」FPIC セミナー資料
- 小沢真嗣(2002)「子どもを巡る紛争の解決に向けたアメリカの研究と実践—紛争性の高い事例を中心に—」ケース研究272号149-167頁
- アイリーン・キューン上田勢子訳『10代のメンタルヘルス 7 親の離婚』大月書店
- 厚生統計協会(2000)「人口動態統計特殊統計報告—離婚に関する統計」
- NPO 法人 Win(2003)『親が別れても愛される権利がある—養育費実態調査』ひつじ書房
- 湯沢雍彦(2003)『データで読む家族問題』NHK出版
- 佐藤文子編(2003)『離婚した親をもつ子どもの気持ち』アンカップリング研究会
- 石坂晴海(2004)『×一の子どもたち 彼らの本音』講談社
- 太田純子(2004)『離婚裁判を越えて—それぞれの命との魂』近代文芸社
- 小田切紀子(2004)『離婚を乗り越えて—離婚家庭への支援を目ざして—』ブレーン出版
- 家庭問題情報センター(2005)『養育環境の変化と子どもの成長に関する調査研究—離婚した親と子どもの声を聴く』